

技術人間

J1988
JUNE

6

に現
挑代
むが
総問
合う
雑も
誌の

昭和49年8月13日第三種郵便物認可
昭和55年6月10日発行(毎月1回10日発行)
第17巻第6号第178号

特集

いま、自保を考える

- 新石垣空港計画と
開発経済の神話
多辺田政弘
- 石垣島の社会と経済
杉岡碩夫
- ウクライナの
原発拡大計画を
見直せ
松岡信夫
- コンピュータ産業の
舞台裏
土方智
- 現代科学と安全性
武谷三男
- S君への手紙
大和田徹
- 「火種」を共有する
沢田猛

Gijutsu to Ningen
Publishing Co.

グリーンピース・ベガ号事件をめぐって ブライアン・マーチン グリーンピースに敵対するクインズランド州

サンデイ・シエルテマは、一九八七年四月十五日にシドニーを出帆したグリーンピースの帆船・ベガ号の乗組員の一ひとりだった。その船は海上の核配備に反対してオーストラリアへと向かったものだ。サンデイは核兵器には反対の気持ちを持っていたし、航海もまた好きだったので、ベガ号での船旅というこのチャンスに飛びついたのである。

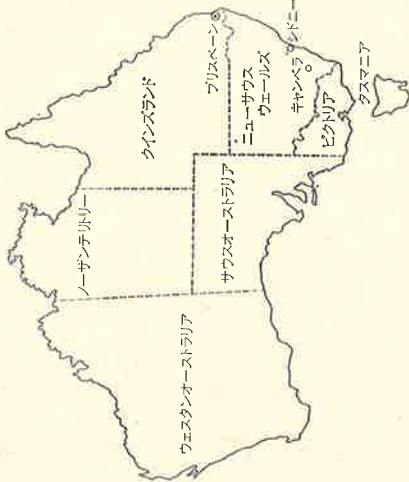
ところがふた月もたぬうちに旅は終わってしまった。ベガ号がクインズランドの州都・ブリスベインに入港すると、警備船に追突され船体は無期限で差し押えられるはめになったのである。ベガ号の乗員とグリーンピースのメンバー七人は逮捕され、航路妨害により七年間の刑務所行きという事態となった。

まったく偶然に、サンデイはそのときちょうど下船していた、これら逮捕された人々のなかには含まれていなかった。このできごとののちに、彼女は、グリーンピースと逮捕された人々とを支援して専従として働くようになり、手紙を書き、広く人々に知らせ、講演をこなした。それは航海とはちがってしまったけれど、大切なことであった。

ベガ号は非核海域実現へ向けたグリーンピースの世界的なキャンペーンの一環としてシドニーを出発した。ねらいは、東部オーストラリアの海岸線沿いのいろいろな地を訪れてグリーンピースのキャンペーンを広範に伝えることだった。しかしながら、この計画は、クインズランド警察により粉碎されたのである。

数年前から米海軍の戦艦と潜水艦とがオーストラリアの港に定期的に入港していた。これら艦船の多くは原子力船であり、また核兵器を装備している場合もかなりあるのだ。原子力船の寄港問題はオーストラリアの平和運動による抗議行動の焦点となっていた。だから「平和艦隊」は複数の港町で結集された。それはあらゆる種類の船舶で組織され、合州国の船舶を「歓迎」したのである。

この平和艦隊の活動家たちは非暴力という点で合意し、乗員やならん関係のない人々への危険を回避するために、計画と訓練とがなされていた。活動家たちの幾人かは、米国船舶の



航路を妨害したり、速度を落とさせた。通常の原子力産業を壊す試みなどによって重大な危険を犯したこともある。

多くの場合、活動家たちは自分の行動に関心をもつ公安当局について連絡をとり合っていたのだ。

ベガ号がブリスベーンに到着したときは、ある一地方の平和団体、「平和と探検船隊」は、米国核兵器積載フリゲート艦ラムゼイの寄港の抗議に備えていた。だから、ベガ号がこの行動に協力したのは、きわめて当然のことだったのだ。

一九八七年六月九日、ラムゼイがブリスベーン川のなかへ侵入を開始したとき、ベガ号は川の船舶水路に停泊していた。ラムゼイは進路を変更しようともたつき、航路内にとどまって、ベガ号を避けようとしたのである。ラムゼイは、目で見て、それから、グリーンピースの船から発信されるラジオ通信を聞いて、ベガ号の位置を知ったのである。

いってみれば、ベガ号はラムゼイを阻止するために待機していた数ある船舶のうちの一つにすぎなかったのだ。事実、そのときはベガ号の四人の船員が船内にいただけだった。ほかの三人は、ゾディアックと呼ぶゴムボートにいたのだし、サンデイは、写真撮影に適した場所に浮かぶもうひとつのゾディアックに乗っていた。

クインズランド警察は、困りはてたラムゼイを支援するために、水上でもまた積極であった。ラムゼイがベガ号に接近した午前十時半ごろ、警察がベガ号への脅迫かベガ号からの脅迫かをみながら、ラムゼイの邪魔にならぬようにそれを追突して動かしたのだ。こうしてベガ号の中の七人は逮捕され、船体は没収されてしまった。

逮捕された人々の中には、英国人船長・クリス・ポーン氏

をはじめ、五人のオーストラリア人と、ニュージーランド人が一人いた。

この事件はオーストラリアでグリーンピースの船が没収された最初のものだった。さらに驚くべきことは逮捕者に対して下された重い刑事責任である。彼らは航路妨害の責任を負わされ、それは、苦役をともなった七年の懲役に値する犯罪であった。

逮捕の仕方はまたひどいものだった。次々と逮捕され、尋問をうけ、違反の嫌疑をかけられた。さらに、違反の数は増えたのである。ボートにいた乗組員もまた、警察を襲撃し、公務を妨害したという責任を負わされることになった。

違反事項が増加することによって、おもてをひとりでお出歩くことさえ被告たちはためらうようになった。なぜならささいな違反行為、またはまったくやってもいない違反行為によって逮捕されることになるかもしれないと考えてしまうからである。だから彼らはお互いに証人となれるように、つねに複数で行動するのである。

サンデイは逮捕をまぬかれたが、いっしょにいた乗員たちの逮捕は彼女の生活をもかえることになった。ベガ号に乗船して旅するのをやめて、数カ月の間グリーンピースのメンバーに対する告発への反対運動を組織することにしたのだ。ベガ号の没収事件は、クインズランド州における市民運動と、それへ向けた警察権力の強圧的な行使との間の絶え間ない対

立を象徴しているのである。だから、ベガ号の場合を充分に理解するためには、その背景にあるものを、ある程度は知っておく必要がある。

核の国・オーストラリア

オーストラリア大陸には、アメリカ合州国の軍事施設、情報施設が数多く存在している。二つの最も重要なものは、通、パイン・ギャップ、ヌランガー、ノース・ウエスト・ケープとして知られている。パイン・ギャップとヌランガーはどちらもオーストラリア中央にあり、衛星早期警戒システム間の情報伝達網となっている。電波通信によって情報を集めているのだ。ノース・ウエスト・ケープはオーストラリアの西海岸に面し、超低周波輻射による潜水艦との交信にとって中心となる施設である。

これらの特別の基地は一九六八年から七一年までに操業を開始した。そして現在もあいかわらずオーストラリアには米国の軍事施設、情報施設がかぞえきれないほどある。おもてむきは、米国政府とオーストラリア政府との共同施設ということになってはいるが、アメリカ人によって運営されているのが真相である。長い年月、それらの実際の役割りは、オーストラリアの長期政権によって市民の目から隠し続けられてきた。たくさんの情報がアメリカでならひろく入手可能であ

るし、デズモンド・ボールドといったオーストラリア人研究者によって暴露されてきたのである。

数年前に、基地の役割りに関してどうでもいような公式情報が発表された。政府見解は、武器管理協定を監視することによって核抑止をすすめ、それは非常に有効な手段である、という主張だ。しかし、手許にある証拠によると、この種の監視機能は軍の中では、小さなものであること、オーストラリア軍の仕事の大部分が合州国の戦争遂行能力を補強することを示している。パイン・ギャップ、ノース・ウエスト・ケープ、ヌランガーはオーストラリアのなかで、最も適当な核標的であることは、ひろく知られているのである。

オーストラリアの平和運動は長年、活動のかなめに米軍基地の反対を据えてきた。その活動は、おもにオーストラリア労働党に基地反対を迫ることに集中してきたのであるが、労働党の政策に影響を与えるまでには、依然としてなっていない。

遠くに離れている基地に対しても強力な直接行動がくりひろげられた。最も有名なものは、一九八三年、パイン・ギャップにおける「女の平和キャンプ」であろう。

一九八〇年代初頭に、原子力船と核積載船とがオーストラリア港へ定期入港するようになり、ダウイン近郊の空軍基地へB-52が飛来するに及んで、オーストラリアは米軍軍事戦略のなかへ加速度を増して組み入れられていった。これは、

オーストラリアへ米軍軍事施設が侵透してゆく重大な段階といえただろう。当時、オーストラリアの平和運動はまさに広がりはじめたときであり、現在よりもずっと小規模の抗議行動であったために無視されたのである。

米軍基地と核積載艦寄港とに平和運動が焦点をぼったことで、ある種の批判者の目にそれは、反米であるかのように写った。ソ連や他国軍事基地、核兵器積載艦の寄港などなかったのにである。

オーストラリアとニュージーランドとはいろいろな点でよく似ているのだが、核に対する対応はまったく対照的である。ニュージーランドは、米軍の戦略情報基地をひとつも保有していないし、一九八四年には、新しく政権を手にした労働党は核兵器積載船や原子力船などの国内への寄港を禁止したので、アメリカ合州国との間の軍事条約が破棄される原因となっただけだ。オーストラリアが、はやくから、米国の世界核戦略の中に組み入れられ、軍事、情報、外交に関する二国間の関係を築くことにより、国民にそれが「ごく自然」なものと思ひ込みやすい状態をつくったことがニュージーランドとのきわだった違いであろう。ニュージーランドでは、米国のこのようにした関係がないので、平和運動とそれらの連合とは米国に主導権を渡すことを拒否できたし、そうすることによって多数の支持を獲得できたのであった。

米海軍は、今後もおそらく船内の核兵器の存在は否定も肯

定もしないであろう。しかし事情通によれば、オーストラリアに寄港する艦船のはほとんどは核兵器を装着しているという。したがって米艦船の寄港を認めると、オーストラリアの港が核の攻撃目標として最も適したものになってしまう。

米艦船の停泊する港は、オーストラリアのなかでは人口密集地に近い。この事実は、米軍基地に向けた抗議よりも、米軍艦船の寄港に対する抗議の方が組織しやすいことを意味している。平和艦隊が複数の都市で組織された。これらは、オーストラリアの平和運動における非暴力運動の継続にとって実にふさわしい課題を提供することになった。

グリーンピースとは

グリーンピースとは、環境問題を扱う国際的機関であるといふよりも国境を越えた機関といったほうが表現としてふさわしい。その特徴は、強力に組織された直接行動という形態をもつ非暴力行動にある。たとえば、核実験海域に船をこぎだし、オットセイの赤ん坊の虐殺を止めさせてきたし、核廃棄物の海洋投棄を阻止してきた。グリーンピースの活動は、よく人々の目に触れるし、広く公表されるのだ。

グリーンピースによる派手な活動はみな、注意深い調査と綿密な計画と訓練、多くの舞台裏の仕事に支えられている。グリーンピースの活動の効果は極秘の中央指令にもとづいて

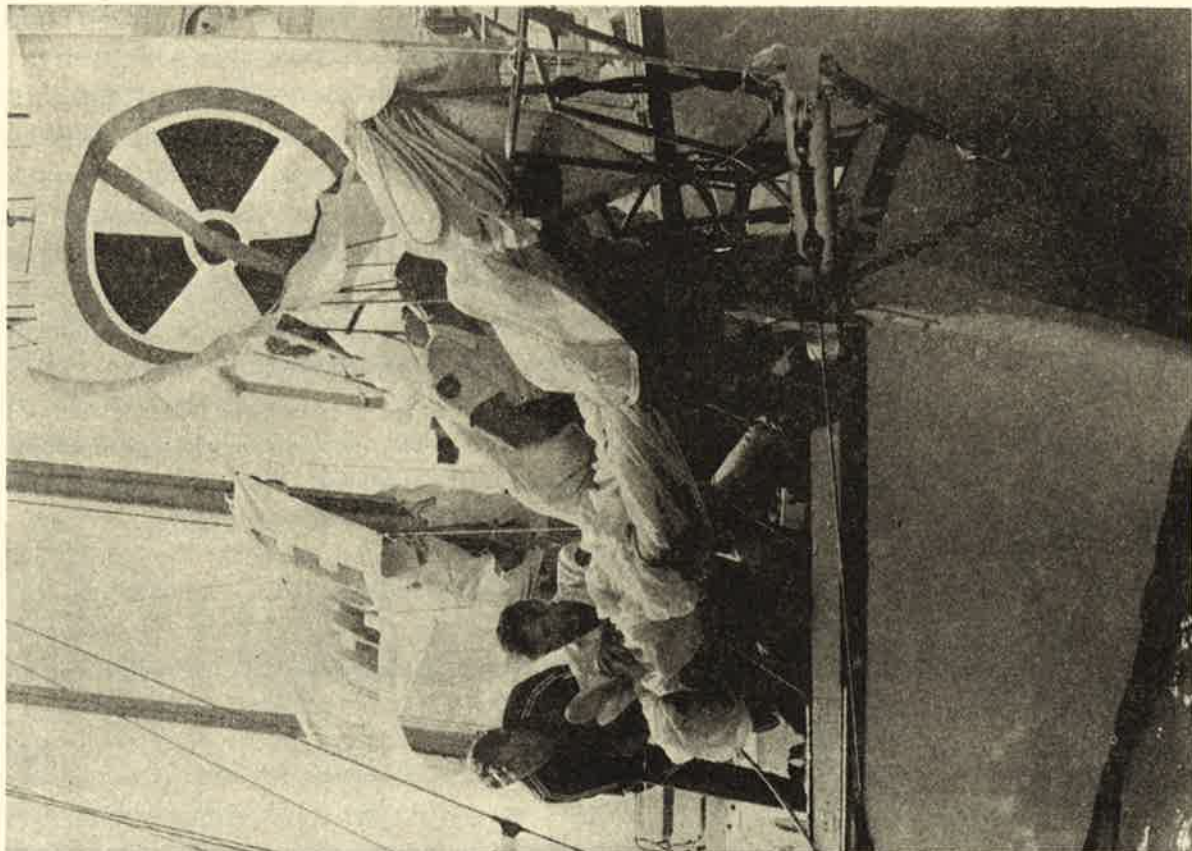
いる。別の組織にいる活動家たちは、合意をふまえた決定と平等主義政策を重視し、時おり、グリーンピースの会員と、その上意下達方式とを批判することがある。しかし、多くの人々にはグリーンピースは有効性と実行力とのひとつのモデルとして認識されている。

一九八七年七月、グリーンピースは非核海域を広げるための国際キャンペーンにのり出した。おりしも一九八七年七月とは、フランス軍の秘密警察の手先によって、ニュージーランドで「虹の戦士」が爆破されてから二周年にあたった。その爆破で、虹の戦士が沈没し、乗員が一名死亡した。グリーンピースは世界中に知れわたったのである。

オーストラリアでは、自国と米軍との間の海洋上の協力体制をめぐる、すでに平和運動の中に論争が起こっていたので、グリーンピースの非核海域キャンペーンはちやうどうまくそれらと結びついた。それがまさにベガ号であったわけで、グリーンピースはクインズランド警察によって目をつけられたのだ。

クインズランドにおける政治的弾圧

連邦制をしくオーストラリアの六つの州のうちの一つ、クインズランドは、他の州と較べて、政治上の異なる意見には恐ろしく不寛容な州である。深北部という特質をもち、ここ



ベガ号の船長、クリス・ポーン氏を押しさええつけるクインズランド警察の警官たち。左の警官が船長の足首をつかんでいる。(クインズランド川に浮かぶベガ号船上にて。1987年7月9日、写真撮影はサンディ・シエルテマ氏)

クインズランドでの政治的自由とは、権利ではなくて恩恵であると政府には解釈されている。クインズランドと他の州との違いを強調するのは正しくないけれども、政治的弾圧はクインズランドにおいてはとりわけ重大な問題であろう。

オーストラリアの憲法には、言論の自由とか集会の自由とかが確立されていない。一般的には、イギリスではこれらは古くから伝わってきた権利だと思われているが、クインズランド政府は、法と警察権力とによってこの諸権利を奪い去ろうと企ててきたのである。しかし、この目論見はさまざまな市民グループから抵抗を受けている。

一九五七年まではクインズランド州の政権はオーストラリア労働党が握ってきた。労働党政権というのは、市民の自由に関しては貧困な歴史しか持っていなかった。そして一九五七年以来、クインズランドは、自由党(保守)と農民党との連合政権によって統治されている。農民党は、現在では国民党と改名し、最少限の得票で議会に多数の議席を獲得できるような自分たちだけに都合のよい選挙区改訂を行なって成長してきたのだ。数年ほど前からは、自由党の助けをかりずに、組閣可能なまでの勢力になった。

市民の自由への敵対姿勢は、社会運動と労働組合の挑戦をまねくことになる。オーストラリアのベトナム戦争関与へ向けた抗議行動が一九六〇年代に高揚したのに伴って、クインズランド政府は道路交通法上の数々の規制措置をよりどころ

としたのだった。会合をもったり、行列を組んで歩くのにも許可証が必要で、とくに理由のない場合は許可されないのである。無数の逮捕者がでた。それはとりわけ主都ブリスベーンでは多かった。ベトナム戦争への抗議は、市民の自由を支持するための抗議へとつながっていったのだ。

南アフリカのラグビーチーム、スプリングボックスがオーストラリアを訪問した一九七一年には大規模なデモが組織された。スプリングボックスがクインズランドを訪れたとき、なんと政府は非常事態宣言を発令したのである。警官たちが、デモ隊に襲いかかるのは普通のことだったし、警官が仲間間の暴行の目撃者を無視するのをもまたあたりまえのことだった。

一九七七年、クインズランド州首相のジョン・ビルケ・ピーターソンは、政治的な街頭行進は以後違法行為となるむねを宣言した。これで知事へ訴える権利は奪われることになり、さらに彼は許可証を目的としたどんな申請であろうとも却下されることになると述べた。この禁止令は以後三年にわたり政府に挑戦する「歩く権利」運動の契機となったのである。市民自由論者、反ウランウム運動、教会、複数の政治家らの支持によって、歩く権利運動はかなりの支持を生んでいった。

政治的街頭行進の禁止措置は、はじめ、「法と秩序」の守り手となって、選挙民の支持を獲得して政権を助けることにな

るだろうと思われたのだが、抗議を続ける人々への警察の野蠻行為、略奪行為が発覚すると、結局はクインズランド国民党の執行部も含めたたくさんの影響力ある人たちも禁止措置に反対するようになったのだ。驚くべきことにクインズランド労働党は生半可の立場を示したにすぎなかったし、マスメディアはほとんどが禁止措置を当然のこととして支持したのである。

反対意見に向けたクインズランド政府の政治的な攻撃は例をあげれば他にもたくさんある。アボリジニへの抑圧政策とか、ヒッピーへの軍隊による急襲とか、中絶を行なう病院の破壊とか、書籍と映画の検閲、教育制度への介入、労働組合への攻撃、身身や地位に関する干渉、政府の官僚主義の弊害など、枚挙にいとまがない。

最近のクインズランドの麻薬取締法では、警察は令状なしで家宅捜査がみとめられ、内臓検査、身体検査を行なうことができ、申請する必要もなく四八時間、容疑者としての身柄拘束ができるのである。もしも指定された麻薬が、ある人の部屋から発見されたりしたら、その人は、場所を提供したことになるので犯罪となり、一五年以下の懲役となってしまふ。

この法律は「薬物濫用取締法」と言われ、政治的な問題のなかへ、警察権力が無制限に介入できる道を拓いたのである。たとえば、捜索の過程で自分たちの所持品の中に薬物を故意に入れられて、みせしめとされてしまうことをグリーン

ピースの仲間は懸念している。

クインズランドでの市民の自由への弾圧は、普通特定の社会運動をねらい撃ちするためのものだ。一九六〇年代、ベトナム戦争に加担するオーストラリアへの反対運動のときがそうだった。一九七七年の、デモ行進の禁止措置は反ウラニウム運動を潰すことと、クインズランドのマリー・カトリン鉱山からのウラン鉱輸送を継続させることにあった。ベガ号の船体没収とグリーンピースの乗り組み員七名への厳しい対応とは、以上のような流れのなかでおこなったのである。

おおかたの政府というのは社会運動を潰すために、定期的に活動家を懲罰に処すことがある。これは、イギリスでは一九六〇年代初頭にはじまり、当時増えつつあった好戦的な平和運動家たちをおさえつけたのであった。アメリカ合州国では、核兵器施設に反対した非暴力直接行動の活動家に対して、厳しい判決が下されている。

グリーンピースに敵対するクインズランド

グリーンピースのメンバーが懲役七年となる可能性がある現在、そのことは、米軍の核艦船に対してこれからも抗議していこうと思う人々を萎縮させるに十分な役割りを果たしている。これこそが告訴の明白なねらいであり、それは、多数の平和運動家がブリスベインに集うこと、他の地なら抗議者

に立ちただかるこの巨大な存在へ近づくと、なんら違法行為にならないことを考えると、なるほどとらなけるのだ。

まぎれもなく、告訴とは脅迫である。グリーンピース側は、今回の事件を情宣することに慎重になってきた。なぜなら、現在審理中だからだ。情宣を避けることは、行動的活動家たちの目を司法処置へとそらさせることによって政府の手中にはまってしまう恐れだからだ。ベガ号とグリーンピースを捕らえたことで、クインズランド政府はとんでもない敵対者をまねき入れたことを知るべきである。グリーンピースはメディアの操作に熟練しているし、国際ネットワークを持っているのだ。個人のレベルから組織にいたるまで広く支持を受けている。

ベガ号は十月二日に返還された。没収されてからほぼ四カ月経ったときだった。この間に警察は、グリーンピースが非暴力行動によってベガ号を「解放」することを恐れていたのは明らかである。返還されたときには、マストとプロペラが鎖でしばられていたからだ。

ブリスベインで逮捕された七名のうちの一人、サラ・ハンコックもまた警察を襲撃したとして告発されていた。何か月もあとになって、告発がとり下げられたのは、事件に関する警察発表がとりてい支持されないことを示す動かしがたい証拠があったからである。

クインズランド州政府はいま、起訴の難しさに加えて、

混乱のまっただ中にある。警察汚職に対するフィッツシエラ報告では政府要人の関与というやっかいなことがわかってきた。警視総監が「わきに立って」いたのだ。一九八七年十二月一日、この州の長期独裁政権の首相、サー・ベルケ・ピーターソン氏は党内の人々の反対にあって辞職に追い込まれた。

サンディ・シエルテマはベガ号に乗って航海に出たのだが、クインズランド警察に拘束されたグリーンピースの乗員たちの告訴に対する抗議行動に数カ月を注ぎ、旅をあきらめたのだ。結局、十月には、バイン・ギャップの抗議運動と力を合わせるために、ブリスベインをたち、ニューシードランドへ向かうことになった。同様にすべての努力が注がれた。

ブリスベインの逮捕された七名の裁判は一九八八年四月に行なわれる。今年はクインズランド政府にとって重大な年となるらう。万国博覧会を主催して、旅行者が海外から多数訪れるからである。政府による社会的、政治的な抑圧政策に反発する人々は、それら旅行者たちに警笛を鳴らすことだろう。熱帯の楽園とはいったい何であるか。ましてやそのかげでは、自分と異なる考え方が押し潰されているのだ、と。

(ブライアン・マーチン氏は現在オーストラリア南東部のウラゴン大学に勤めている。原文は英語、訳、本誌・村上茂樹)